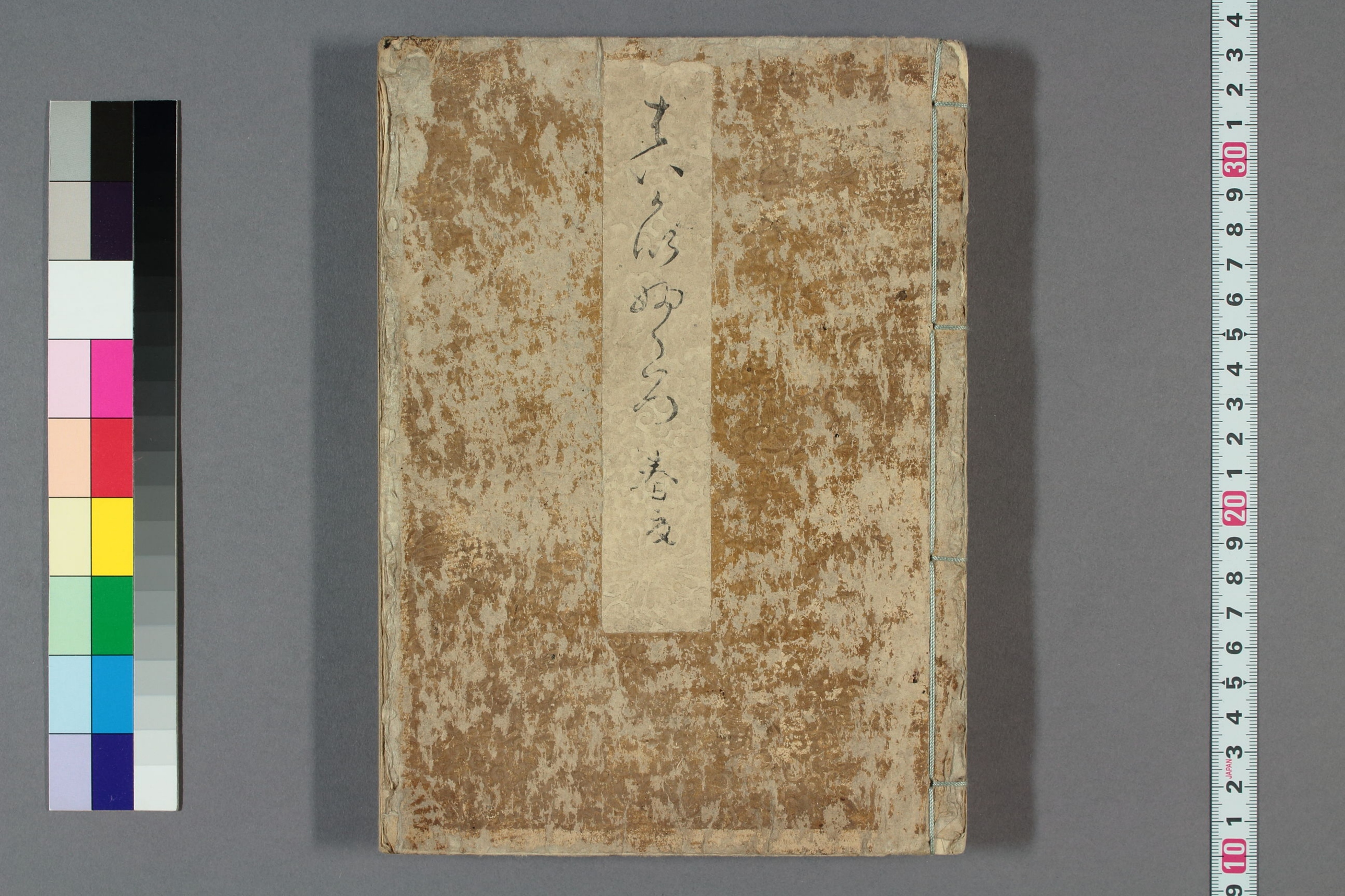

春夏

文化丁巳二月廿五日
希皓亭乃
あるしに四津る

あるし庵
太口

[illegible]

序

嵐雪可其俗あ栗我ニ傳ニ續
我の不ら俗あ里なほら種可義
拾ひ法くしてこと記月我かけらる宗乃
志未美多彩夷堅秋との藻しほ
くは栗まいつ絶りやといふ嫌る婦る園
我ぬしかたいかい俗乃はし然に

雲英文庫

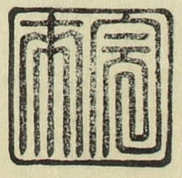
題 少しいるゝ志よりし事

雪中菴蓼太

此席ハ蓼太叟の文来庵にかゝ坐て与へ
ち利を翁ゟ何乃抄ふとゝろを忘て
せんとゝへるゝまいて書しおのま月居に
筆を少しゝもしるわもてこゝに書ら
けを名印ハ在世に於くら新し記念とう

なのまいつの大江丸いまゝふるくに
たゆゝ時古れ猫集の在あゆゝま
先人蓼太その結をといふ
縄ゝまゝしをるほのあつちの
希俗にてこゝにひさし名
月日れしもをたゝ表こゝて
を寄せ繍に延命袋を

掠めて古宮を行るゝ志とき
俄諸魯滿の德を志とほきて
其外國を殘き其裏を括る
ことのみて東都の市場完来



ませ給ふ脚の掟

一 一宿のお再者すべからずあるべきさる筵を
わりふ事し

一 腰に寸鐵ならども帯すべからず思しくれ
命を捨てくなり稽君父の讎あるものを門
外にあらしめべしいさよしまぬのうちを見るのひ
さる情あるもなるを

一 衣類器財相應すべしをしまもたさる
もしかしす

一 魚鳥獣の肉好く食ふへからす美食珍味に
あけれ人ハ他よりも遣やすきものなり菜根
を咬く百事なすへきと云語あり工夫すへし

一 人の目にあたらぬ己か身ハ出来るたけ自ら
うちからすへし

一 たとひ嶮岨の境なりとも不労れ急起の人
うちはおこたらす中々得るへし

一 馬駕に乗へからす一枚の杉木は病脚と
此するへし

一 好みて酒を飲むものは誉をうしなひ国を滅
すうすとも微醺にして止へし乱に及ぶ乃
節迷乱超罪の戒祭もろもろの用ゆるも酔る
を慎くなし禁酒に遠さかるは訓あるへし
免んや

一 毎朝菜代とすへからす

一 夕を好ひ旦をなまけるへし旦暮は脚
よりよきこと好まさることなり人に労ありくれ
よきを捨まとまくもなま味せらるるは言を

[illegible]へし

一 代の短をあけ已の世を取たすことなれ人をうしまくもよほこるをもなきて娶しきさなり

一 俳談のお雑話をつゝしに雑話をなはぬかしく労有やしなふへし

一 女性の俳友をもしむへうしにおもも男子もいらぬことし此道を親炙せる人をもて作ふへし悪く男女の道を別とりのこと流蕩すれる人数すへうし次此道を主一世通りて成すよくこれ省くへし

一 主師ことの一針一草たりともそつうしに山川江澤も其ぬしあり勤よや

一 山川舊話をしく存ひ入趣のしす私の名を付けることなれ

一 一字の所表ともすることなれ一句の理を解せすんの所をなすなれ人をおしゆるを已をなしくなのことし

一 一宿一飯のまもおろかまおかつてしたさりや
とく媚諂ふしなれぬ世の人は世の奴なるを
此道を人をのは此道の人ましりなし

以上

さいかい俳

春之部

市ま柿葛のこんさくさくはし
とりまへれまとしれ歳旦とす

ちすやちはちのす千代の春 宗因

あくまでもうむ一つの松井 大江丸

おはしまきれしまたなき
あけのくれ歳旦とす

諸國一見の宮ニてけこさのちる 天府

これこの夜をめいはのもあ 大江丸

[illegible]
[illegible]
七日[illegible]
[illegible]
東風さそふ路の一声関地 不二
[illegible]
麦えすす[illegible] 八千
[illegible] 紫暁
[illegible] 関更

不寒

下戸と上戸の名を申よき 雨什
[illegible]一順 下略
壬子ノ歳且
かなくぬよ三千年のけさの[illegible] 大江丸
[illegible]
紅毛ノ船の[illegible] 不二
癸丑のし
[illegible]上より遥ねして

住吉のまとのかくしう恵なし　大江丸
あれいつくもきしのひめ松　完来
ねるのこの昇れなるなりけり　不騫
甲寅　うまれしとしなみ遠ふ
としの春今四五疋のつくしむ　大江丸
竜のひろまる若艸のせ　完来
ゆのほる仲のせつもの　天府
乙卯歳旦
蒼松翠竹　知多少

盡在祥雲五色中
大洋のこゝろ　ゆうむ　ゆはめ　大江丸
松ゆきふ　元日の梅　嘯山
ゆきより　百馬百牛　ひきて　八千
丙辰歳旦
えいかいのうらとなりて
いさ一支干の降りをはめし
守武も宗鑑もなかとの松　大江丸
ゆうまる父母のうら　月后

一字武神を祀り申候の称ありて
天明屋根命二十九世の孫荒木田従三
位守房の子也秀の九男正四位上
岡田長官と号ス 天文十八年八月八日
卒ル七十七歳
かくとあるもまことなるべし
千代もかえむ
戊午歳 昌
千代もかえむ 大江丸

お直江の子也 如泥
一紀行
一己歳旦
一紀年の俳諧あたいかえ
かきおきそうろうつつ 大江丸
焼死小日乞きぬ 宝永
うつしおきそうろう 不二
俳書もそうろうて 小一日

三都これの友とひつく日　午心

喰積る男の情を咲けし　陶叟

己未歳旦

まつりのしまかし作自主
かくかりみて

法国一見の客二万八千の　大江丸

なまりくりふるさめのちかひめ　天府

くすのむかりの流頭らへ　宗来

庚申歳旦

とまるや初日の家の忘れ　大江丸

代々の雁もちかしの山　宗来

安めちる蛸のはまるて　不二

さもとく[illegible]

文も[illegible]心ちく花の出れ

えりの人やすき猿の琵琶の音

はるや身のくめくの松とうぬら

此より吉野のみのえ
あらしもし

元日やしぬなるに公家のまね

一梅翁宗周を俗名西山次郎化豊一
和後国主加藤清正の三男右馬之助
忠之之臣也右馬之を連歌の達人
ゑ風宮心ゑつり加藤忠廣の代となり
公の事をたゞかせられ其の山石城の
城主内友左京太夫殿あつけられ
其ともかの城くらしら後に戸ゑせて

昌琢の一人となりしら清以子一家をなし
和之国とよふ又清ゑ此ゆり松江雑舟の
一人となり郷かいを学ひしらくれ又出世し
みけるゝ諸林の一流を起し浦内ひらくひとけ
流ゑ俗や清ゑものもなく信徒此をもこのつり
おうつり宗城の諸ゑも国よりちいかいを得
風虎露清と雪ゑ名たゞの屋し国のちり
大坂の天満に住し天満宮の連歌を
ふたひ起しこり まゝらせらゑ子孫へき

そゝ西山のなさのこやり一行にて法印
守信のひことなりけれいふ　天和二年
三月廿八日七拾一才にて没す
天満西寺町　西福寺に住くの
墳あり
月れにハうに京くの住まり
ねもあの京のうちにはいふひの
なるはつのひめれにいふ馬ちに月れ
むめられさまへ遠くあらふまり

指画のむめり
いうに無かなこのむめにて札を付て
馬帽子きなたつ暁の絵つゝ
ち坪やあらに上くまり京めてきさむ
おなつくしたるの地にいふ
元政ゟ母りまいらんよめなる印
うち絵ゟ画
今ないふ七年のふるに明のる
うんとりれ卯かつりん花の春

元日の愚癡そしりしせ君之
たなのまちの室一條の　松のもとに

一良徳の撰せられし良茶集に加ける
むし　元吉の詠る　兒島高徳ゟ　主上を
うたむまひて舟ゆふ　他来ゆるゝ
院の庭へ入せ給ひけれ　せめても忠義の
心をさしもよいてせんせし　法庭のさくらまさ
けつりて　天莫空勾践　時非無范蠡

よかけしりとのなるゝのしみまとこうほの
ト文字に連声なし　これらの心さしも
えらしとさるやい韵韻ハたるに法く語し
なりちの日おとしたる婦の抱しつめ
抱あしいゆめられう　茶うち
さくらしたるまたまたり　抱く茶
これろし　二三里ひめの君を慶ふ
うれを同りの山抱めい
あてうれ　抱り大事の日なりけり

春のアハ君のはかりむやひけり
てゝこれ　悪髪ひをひしまか邪

うらひまや鶴をのかし碑のまる

元既に岡人を詩のちまに風雨の日也
けふのみりき日を人をおりしてせて為ふし
よりしまち物の舟むをかりへとまれ

うらひまやさハはしこなき悪をやす

うらひまのむかまのはふえ山下
金衣鳥やこのわたりな後不入の地

これ雲や皆うらひまの口の海人

きてはしてうらひまさまる　十歳
小島分り花を祝す
このこの又千うらひまの子ちまて
千歳のうらひまをりいかつれ

支磨 加州宇陀郡田山別当後先為納武
后旗本加文 旧徳弥西鶴門人西丸宇閑直
門なり 元文三年 天満死八十三才 正月廿一日
　手向てもちるへき花のかる
支考 美濃山縣山下北野人各務氏 箕雲山大
知寺僧十九歳下山東花西花野盤子蓮二
見竜 白狂 黄山 梅花佛 中年伊勢十一庵
濃州 獅々庵 享保十六年亥二月七日卒又
六十七才

渋川 関林 福多よ 杉も 梅

つきまゐり例のいそ松らくの助
かめはら松原らくの山ひこもく
ふくらみ仲秋よりはかりてかしこら

松らて今のいつ下又と記八ちすり
いつ松り三更の月こてかむ
むく植の水の花の如かつのまつ
十日らて日もかゝやれかるの松

一信まのいふとゝ[illegible]の人もとゝぬとゝ[illegible]の
[illegible]のむめとゝ[illegible]青[illegible]紀 曲翠 志忠[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

城乃と[illegible]矣のとゝ[illegible]

[illegible]

春[illegible]

[illegible]
春[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
水時計[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

仰ねこり奇も清のりもなりけり
さしや羅國よりつ人の此よりみちて
為まかりよふしを悼
ちしゆ春無ぬひりほめしも

一良能日不易流行を仰ぎの両輪たちの
よのあし其実情の為を不易とし
あるしきこすすゝを流行の為をまなさ
くまいふある唯時勢のうつりかはるに

其界これ流行し又不易あり なくして
宗国流のすゝふしおもひ流のしつゝり清
こめしつゝを流行したおぬを不易とひし
これ両時のよりつゝひしひきる
宗へ

還城の角間に寝る 法ちめ京都
安かれもの給ひて寝る つもめ小
法ちめ兼ま法院の もなのさき

春月

あるつにも月のかたれたるの月

一廣南大泥國より魚のかたりしに享保
十四年まで大ぬを見り寶保のえしめ
はまて江戸子云月られし是れ八十年のふる
年 しかしいまもいきこりし魚ものちしを

一むかしの人まねしなり

七尺の魚こそ所よ たる此月
魚人の場もうちこして去の月
こちらからなるもむ たる此つき

川 陽文

春月

川

人魚りたむ方士かつれたるの月
洛の北人を伴
あるへい月もおほろ此ちなり

雉子歸しの朝の景しこれ間なし
きしの忠人を声にいつ行る
くろうねの法るや たそはむきしの声
中しくり雉子しつゝなるかなりあ

川

雉子

悼

川

かつら川日も嵯峨のさらし人　不二
涼風のさらりかはりて　周来
ねふらすかのはおりこの峰　志に
えいかい郷つゝむ八十の夏
那知やまは花さかりてむの春　不二
男つらむいて見ゆ　了国
めでたき千里の戸さき揺り　志に
江戸俳諧を今り継の舟よ

老杖述懐

ゆくゑもかすむ葛飾がり　春城
葛飾のなまきのふつくしく　大つ九
見つくしまうかほうの茶きえの月　周更
さ〳〵
月をまくらしろきうつろへたまの寝覚
又
稚子咲もたしめぬせめのこ　一紙
百年体やよところの　一紙　志に
不二庵より

けれしりの所をしたまへるに
そつ鶴や孟嘗君の俗にあり　和二
この年来見えたまふ　お関　左江

おほろ月すわ星ありのおぼろなり
のほる日ヲ梨花とくの小とちるし
年在のちはかかけるを所のなる
りのかけとおもり
おりの雪をもおかしくせん
枕せむをはるのおれ　ちめはうり

月花　陪文句

魂育女の碧の御画
春のおもの　由ひすへれ
九日　正月
おしたよりのさらしなに
ひむかあ　るをかゝまの
史をうつま大事のし
月昇也

月花りちほしまるせるかゆ
四天王寺　聖霊　會
せを　遶香のりはつらせて

ぬすびとのよしもなく折れるつえをば
角にあてて唯廉にかほとかしけり
しかのたのよしの川の中にあるを
たらんし嫌りしかれけりたらみ廉
壬午無御
心精の年の住さきふ会仏の勇
机に向ひたり
方朔をひらしめて遠かすみ
あり申のふ所なるやはふの鶏わハ也

一きやぶ雨の大海の柳　アて色きまさしめくれ地ひらおこに　アれるものかハ已しゝ心のつくり　のきさくひまあり　まゝ屋に隠ゝ　ゆり自由なるたまを　法雨の雨に浮ぶ　よりの之と咄りの雨しの地あるりや

そしめ給りこゝろに　たまを柳の柳　まゝ柳の中まゝの国　やさ　たやし　やるき人を春の心　なしさらいら

みしちり日のくあるる柳の柳　みしまほやあ　鶯の柳　旭こ浮　鶯ねのしかけの浮く　まる　人中よかしを　こて秋ぬ柳の柳

一き角大津産坂下順哲　宝晋斎　宝永四年　亥二月廿九日　五十五才没江戸

いそくよきせの浮まや　たまのあの　むる川のあるを　をる日の柳

とも[illegible]ひのたしめ[illegible]

富士山の讃

あふくみれ[illegible]二千年
乳[illegible]山
雨中[illegible]
より後の月より[illegible]

一 令徳 鶏冠井良徳 良薬集撰者 延宝二年十三月七日六十八才 コツケイ 太平紀九十才

いろうれきや[illegible]けるの

一 山崎宗鑑の[illegible]
足利義尚[illegible]
古人[illegible]宗鑑
春[illegible]の二[illegible]
[illegible]

元日の[illegible] 二月[illegible]

月 風 川 川 春 梅 悼

おちかりに二月おひまつ二月ふ卯
老のよきこうしろ頭やとは かまさ
腐ふてる 鹿のみに 頭ほもすし
うちる能とかなのみ くむ 日なりけり

はるの事 おひおすて うらみ
この時まで 穂さなるへこかくひし
速雅のぬしのけふを
なさ人とさしまし
いつもある 橋とうしてきかふ

月 花 八 八 八 八

二月ふ 二月ふ 花 日も たるれ おひける
ふしをあれ 勧進
もしはかけ宇治のあらなかりける
夏の事いふてもの花見卯
小橋の三昧まで
あしこまを紅顔の桃 なけあり
味けしのおもり
法の周りうしをかくさま 桃の菊
もしの花 あまり 春くて のとらなり

已未二月廿四日本願ち中奥蓮如
光壽上人三百廿忌京都なし法要れ
まつりる家ハ心をこめて
日宗のうへ御座
国ゆまるたるや十万八千忌
とし年草うゆるまい御つとり
きく面やひまめたれて道なうら
さるの所をもする画り
攫とられくとやよふとり
くるくらつり牲とらいいさくられ
志人の御座

かけろふやあき絵ゆれこゆれなるへ
千代能ゝ名かけろふとゆる之
蝶の耳こる天の雷を聞く
と川畠志まいたるよき迎訓
住吉の松の相生なる前を
御力の仕なりに奉るとして
三ゆれ見すれぬまゝに春の松
かゝりかゝりかゝりて
法名をそれし

ちまはしのう 松も死けり 天府
こつてとらふきり 級 柿の友
柿りとら 冠ときひりし 泣ぬなり
いくし東角のみ長おかゝるとり
きるるしは 見のく 老う紫金と
おとこの印 松の法ぬうゝ長くふを
たるかやや出てこふ又春の月
閻王のたかりうこふや たるかりせ

略するといふ一字
こうひまし 秸家 蜂はさる姓けり
まおまこ 心ちしれ たちの法ら
菓の蜂の 地ぬしさしける 終の印

一 祖三師終信三日 家の人は自然ある
ひやしよきんの ちんも 柳子えト 子柳子
ちるを 祈りは 姓にし 略りしたる 紙の
柳子えの人も 心ぬてあまんえ

江戸南溟勧進

花のあらしもなかきなかのまことなる
るゆさるもひきつれけり花のふ
たゝ紙のあらふる花の花の中
るをつゝふ花くるゝ紙ゝれたよ

江戸千心判者ありに

キ角いてしふてひ花の志賀
花のひかり中ことゝ忘れなりけり

相高堂まつかほの父七十九歳
二月十日あまかりまれしる
花かりて和かりひとつの生かれ
ハ風老人を悼
相まかつる花や七十五年かり
悼花と人の本刻
りの刻ゆきなまむまふら岡の松
白花の本拓出是むの盤を出るかし
きゆきゆよしのしめ御のひしを景

この前をてよしの花さかり
九月末に大地九ぶ風をちらん御
持てきたるに花をうしなふ事
安藤山の花
それ花につゝ曲きかを定かしを
親しきのまゝにこそ白し日のさらし
三月につゝめてきりのをさらか御
一野ノ口立甫俗名お務や産立つ画を掛山子にまひ
さを出に師より寛文十二年子二月十七日七十戌

拙かれし時よりしらぬさらか御
風のあれ御しらしていさ掛こむ
さらぬ時て花ほかの日なか御
ひとも左やの中のまて 俗やう新かり
文ちらむ花の中山 七十二
面ほれたるみりのをちさらし
をふるちほ
科ありて人事であつてさらぬ
この時や猶しつまりて花ほ人

奈良緩賀母八十賀

花 [illegible]の女翁や　八重さくら

[illegible]の人り　賀す

自然と語をほるまで[illegible]のなるひけり

ひとつ[illegible]の[illegible]を[illegible]かいたり

こかいまる[illegible]やしあらん[illegible]

丹[illegible]

[illegible]百[illegible]しまをこちらに来

一蓮二ら石員[illegible]て石[illegible]ひとわしも

[illegible]へ[illegible]を[illegible]自然のくつかいて

[illegible]しおこしき[illegible]の二[illegible]も[illegible]

[illegible]へ[illegible]めし[illegible]つきたらさば

[illegible]しき[illegible]よりもめつらしかひ

[illegible]人のよき女[illegible]もれらわしき

下女[illegible]人員[illegible]をよきて

[illegible]しき[illegible]

晩春

屠蘇

うくひすかたのもいふも交えあめつゝ
ゆるあるりけれ屋てたゝ　せす
こむ人ゆるけしめ

吉後佐伯の人れ八十六の頃
方朔彭祖とも人おそかなる
たゝの人なり　よつとのむへ　まむへ
屠蘇とり　月ナニ　まさ而ら

正本西武延宝六年二月十八日　七十三戈
頁室安原かきゆ　延宝二年二月七日　四才

梅亭御會

ちよの頃なるをれし法ゐ之
宣中年心とりけり法せらり
めるしつゝあまりける

天府

法ゐ一見の宗二てけ古郷の春
見れこのくひとめいほくのむめ　大江丸
みちゆきを宣衛のしつく後なて　完来
うつちをこき　楮の家し　午心

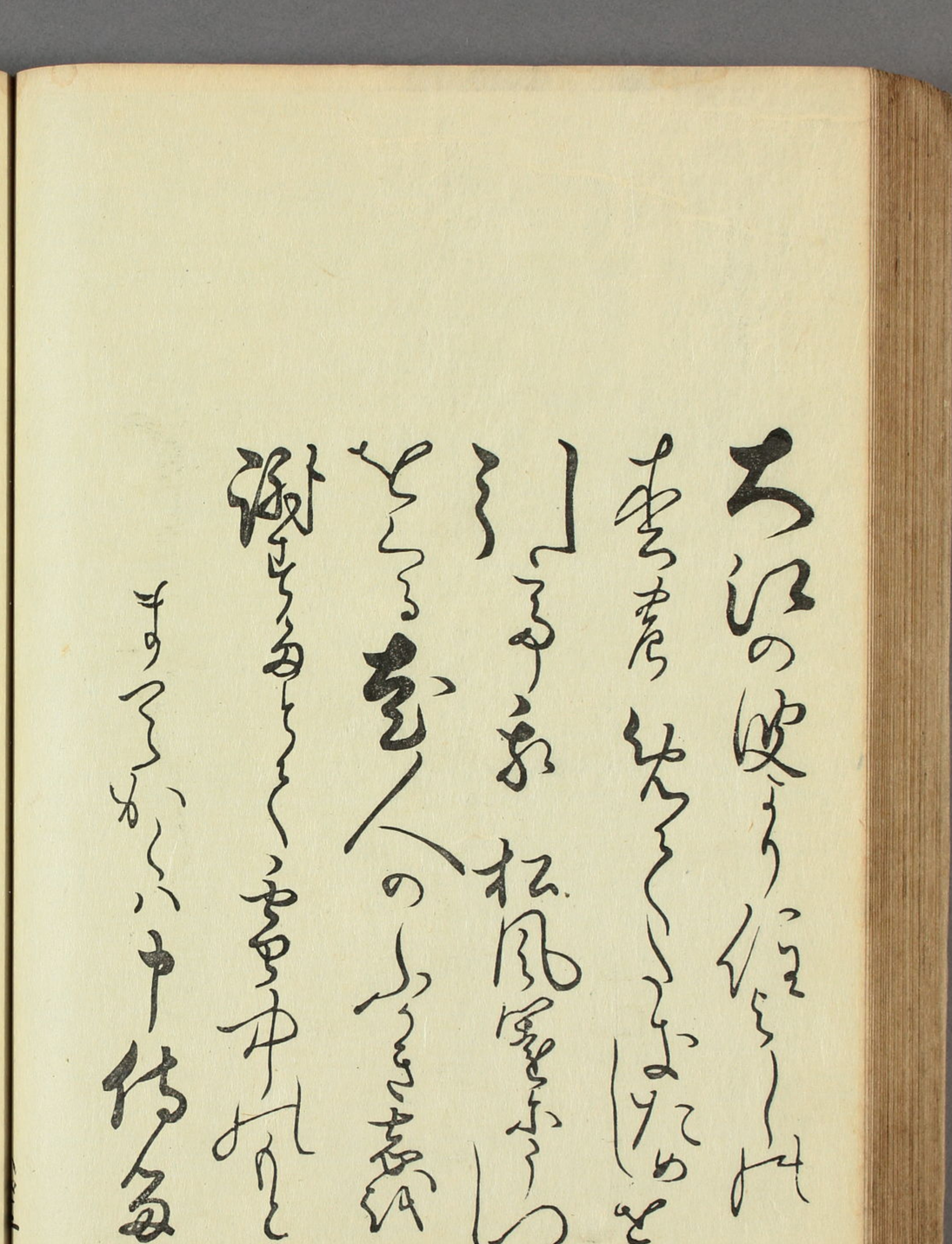
たかくのくまさ持月の空
とみり 烟する 樽のあらば 府 丸
ウ 此ほり 芳のれ 鶴 宮木山
かくとなり 人のあらば 来
おのこきも宣女とまる後 樽の後 心
呼り 僧正のえくほをかき 府 丸
見るぬきら不 告 布面の星 来
ゆふつの 楠しくれとひ 切 心
月宮うふくき 袴を 蒸り 丸

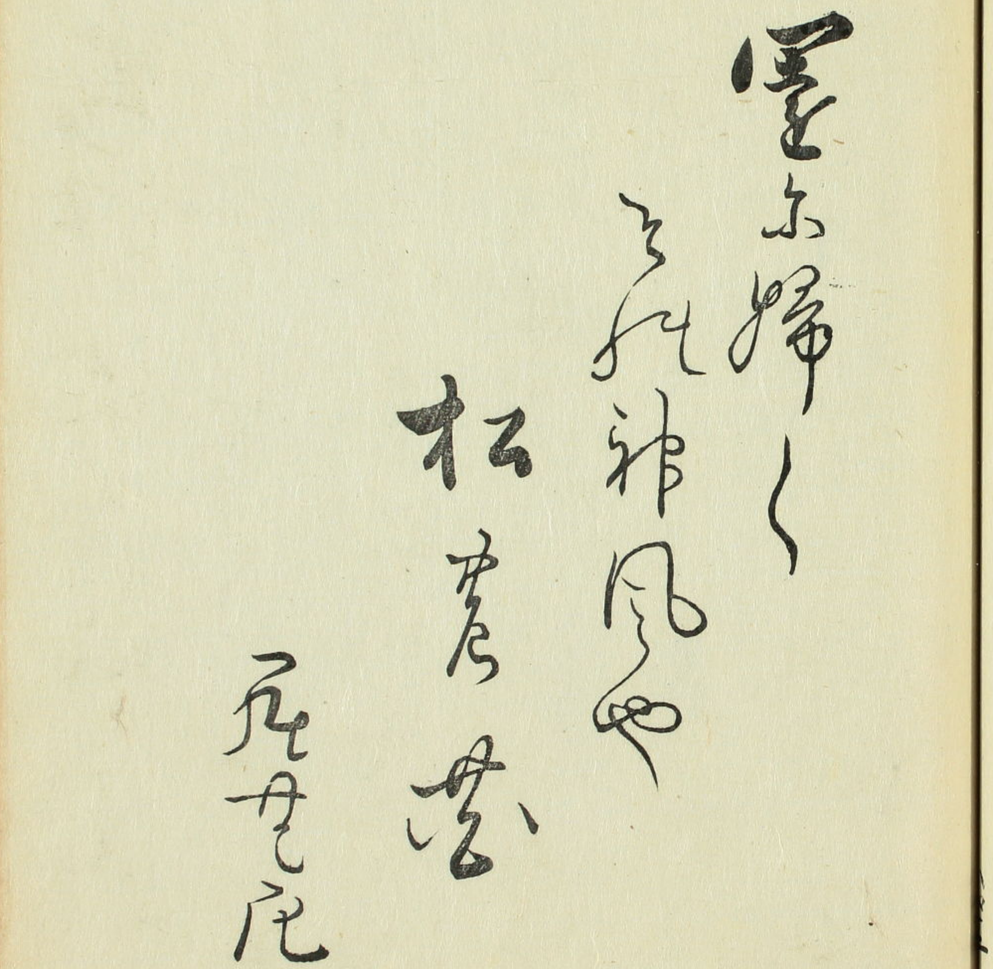
たなしのきのき角力とりの布 府
梵ち 降くち 舩のおとりそき 兵ホ 心
九輪よりる 緑山のやる 来
ひろ屋のちほも花の七曲り 府
わなのきかくかれしする力ヒタン 丸
ちろうはあてうなくぬ 蛍とうも 来
ヨたく 閑ふ 祝言の 燻 心
長光の 浮りるの毛を 見し 丸
七月の 時 時をあさひく 府

たり起れ秘剣の毒の移り茶　心
七世の世者　わの　たる足して　来
二三町ひとすち道の稽古ゆし　府
蔵先の車　きとりしてろく　丸
寸白のうちくふくりおふるも　来
能く見て取らぬ　良工の鑿　心
けりむふ氣も叱りて　月の曲め　丸
かしまひ家の　寿の　あけかた　府
袴きへ人まを高の　関なて　心

あつめてしろき鑑を　姉く　来
証うちて　宗且孤よひ出さむ　府
ちりてる白の　雨を出つる　丸
詩を一見の花まれ　真の名こ　来
白云の姉も　めいたくのたる　心

先懐
あつれのたつく　詩ぬたる時月
安貧守道とふり
花り見とおむ　前年の作たまう





大江の波より住吉の社
素堂 松風をふきつゝ
[illegible]
松風 [illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]
[illegible]
[illegible]
松 [illegible]
[illegible]

一柳たいのかたいかいまもつかし　神さ
たけりの國　ちまみのつ千代家　[illegible]也
人のたのこゝろて　羊時庵　[illegible]のとゝへ　[illegible]
面毎しよの　[illegible]
いまこさ[illegible]の時　[illegible]
ともふて　[illegible]
ちつこ[illegible]　後由緣井　貞柳の[illegible]
雪緣井　一好のりとへ　いさ[illegible]　八と[illegible]
程[illegible]を　ちらしゝ　又　[illegible]　良能の[illegible]

二柳庵　鳥酔　蒼虬　麦水　後川
蕪村　無腸　蝶梦　闌更　升巣
嘯山　呑秋　青羅　完来　八千

[illegible]

雨什春蟻　一無名氏　喜所　木朶のひとしを
みちのしゑ力友なりうるしや人を
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]
[illegible]

せいかい侍

夜の部

をとこらしき人の家も侍ふ四月ハ
花飛び蝶おとろいて裕茶とりけり
心の矢うつ事のこゝろ四月ハ
杉やの代の時千つくらふ五月ハ
わハせきて男のこしをなめけり
目うつりや音如きうちつをとこ

このたびのとゝつもなまとらさしのは
さまれて かまりしくすれ ほとゝぎすかし
かほすくもおもひら 唯 大伴のうら
ちうさ たびのきしのうつ すまね
すふい まゝ所のへ いふすまゝあふと
おほけなきこれかたより 地あれ
よし 四國とゝいつり ふるさ名を
かゝるまくけしたのこちの石牌の雪
えり つふえ せいかいのよひ名を
たびのものをりとめすと
いふすて 次まる
しまる

「くちなわなる事はいつちかつくらん遠
つうふまくり 此物はさとのおめて知ハ色られ
気のたまものありしとれ この御 こまとも
いにしも時代の綱とあり 此ハ深れ 又な考ハ
童平をつれしよしのみ 此ひ 家をよりも
軍をかなし 吉のみと ナやしも 貞徳ゆゑ
おもひ千尋
公為を 喜ふ 元宮のすゑ
寄去よりも尺きを 好きあれ

正章
可頼、

この御為をひとつにして 為とまりいつれも
此源のこゝろのすゑ 八方の世の人の為をぬすむ
なしの心にも 同日の論をあらし 古ちを考る
よろしくて 是ハすべしとり

筑戸の代 二川原ひのうけたつし
さよあらも 童きを 端のふたつより
をすゝれ 掃ふ 松のことりの御
ひとものを 地易き 四月の御

一本いこ画の

一さな姫をなくのひしたくひめをかし
かくて所名を姓の名造化の神をもあらはす
又あらさるはもあらん月ひゆまて一かいまも
ひのにしれ月忘の叫ん

さらしなれ名のさ月川とおほえり
きれて楓のきにり ひきのあ月
多あれ世母にかくしてつまをかい
一左衛門大いかいをものゝ様れだとする

ゆまさひしきを安せさひ当りかめたらつを
左関十郎を顔をあかく侍りなから御を先て
東屋に話さむせしまへしけあらひよかるへと

小の三青亭にして

あめつちよくとのひ花をそらつる
まこくあるし 音にて此志の
あつきなるひとかゝる 叫
御ちかゝ 食て

ぬしはぬしこふい地ぬもちんか

あさねして　ざかも　はるねの蛙　丑卯
残月も日もいれける　かくん卯
牡丹ひらく時雷押子めくるなり
元信か三十四の　はるむかし卯
乱鶯の声しつまりて　おさむ丁卯

日のりの花納て　はれん子卯
日もさくれ星もうごかぬ　かくれる子

一右雪母子以人三日の　かすりを　松ほ子

なつけるうかひさくやまとのなかり
みけてやよめしはるもなつとおもふちの節
かの流何ときまはつはやしてて花ちらし
ちらまめ今ちるは一巻のたえひまかめて
おりふし申なし
農年の定まる　はなんじ

姫卯ノ画きみかま
かく母さらず　よみて　雨の何かなむ

一歳 [illegible] 芍薬の花を [illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]
[illegible]
[illegible]

うつハあらしやさいかいのかこ人
芍薬も萩て方廣御の事
[illegible]
芍薬[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
芍薬[illegible]

竜花菴

灌仏や解きおろしたる舎の子

まみよして南和仙名泉明とふうき
好りけるし自己をうつめ此隠の
比りけりして

酒のみすいつくりて唯屋えうり

三尺の鯉ゆるこの日持とよむ

川うゝや花を見えん　云尺　も　の

一石蝶のきむ　から　落ち　二代目の　[illegible]

けんまふ隠切をおの花かつまあしさ
ふくむ[illegible]ぬまても清かえをけれ所し
[illegible]うさまきまつ終え[illegible]のそれ
もし[illegible]いかのもまむしかるう[illegible]合う
かつまあしさとむつるて隠切すて[illegible]

梅花遠莫知りのはめ柏家雲を
頃ましたる　せるるき借りの庵事
かうてたよかまめてさもられ
自ら弁の号をうもらし　移す

おのつようえちれ安政や自ら弁

江戸井にうちなにしたるなる井屋に
なるの店をまうせんゆくまくら
ゆくの山をまうかつりおふめくさ
見かりて又の面をさちめる

あ井のさうく　年しく　尺子　まさ也
井のこゝ春城の父　七山ま
たかひしつゝ　ちくし　七ちゝ如
有思ふ
こんりかるくり　狩ぬ　姉妹の家

ほり池の僧正　跡は　塊の中
画語
この塊よくく　盧生　庭なるこ
外竜庵　東園　白兎園を譲り　又と
宗瑞　ちちゝ　祝江人　中生
ゆつりこの　ぬりぬしし　白兎園
つくれ唯いせも　源氏も　れのうれ
なるゝ　ゆのゆるも　己ゝ　好きりゝ

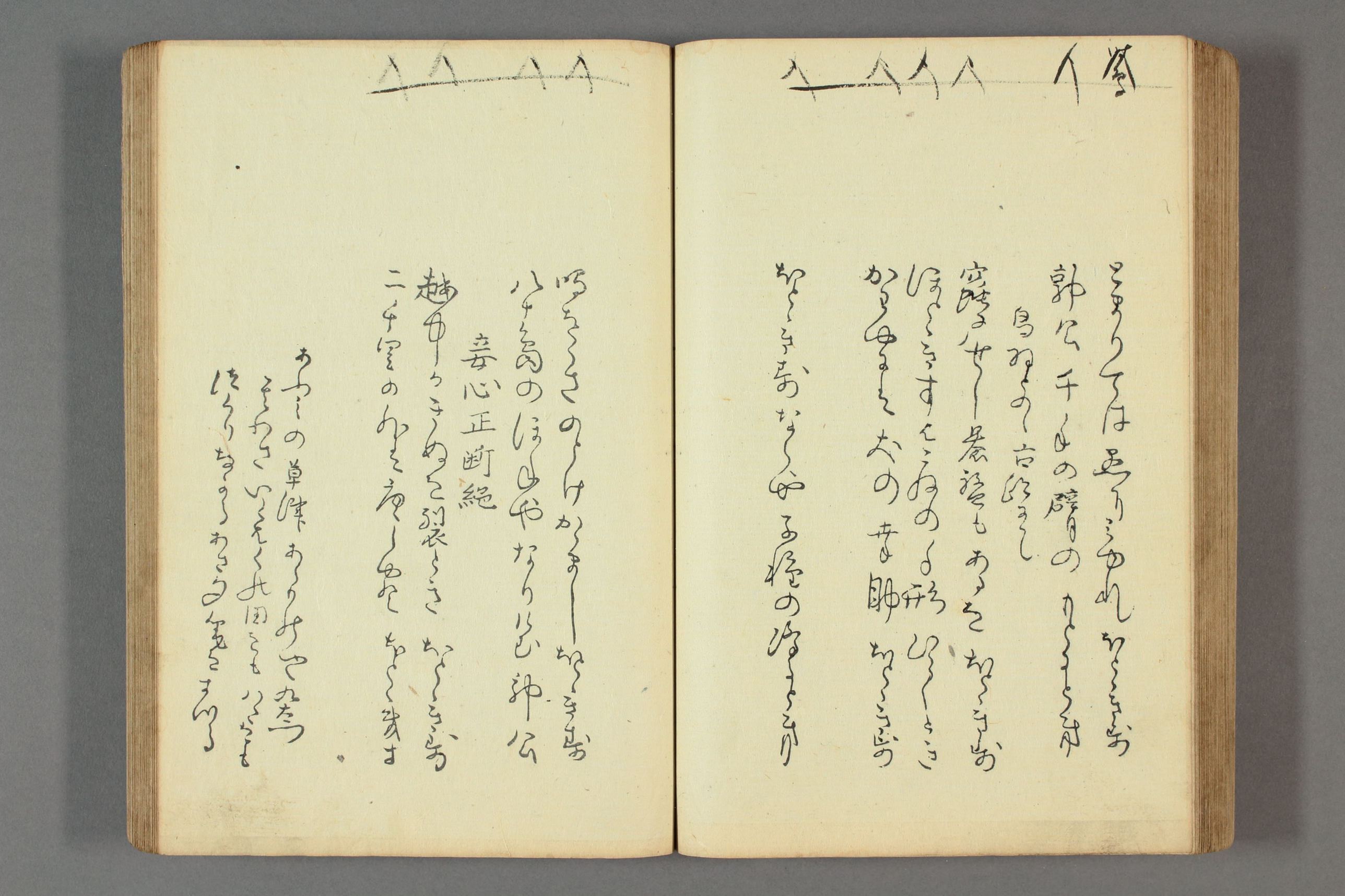
一炊庵 雇進 [illegible]ノ土
六月十三日 [illegible]

この人らの[illegible]
庵のるや 頤 [illegible]

一百山子の白隠りしあれし語の[illegible]
[illegible]の[illegible]いつれの[illegible]
何の[illegible]いつれの[illegible]
閑田子の[illegible]
[illegible]

江戸の音成何[illegible]の白酔[illegible]
[illegible]

[illegible]
いや[illegible]圖[illegible]の鈔進
十二景の[illegible]洋静亭
みさきかけ山[illegible]
[illegible]の[illegible]や迴遊牌
ハテレヒノ[illegible]
[illegible]



まゐりては思りこゆれ[illegible]
郭公千[illegible]の[illegible]の[illegible]
鳥[illegible]の[illegible]
[illegible]せし[illegible]も[illegible]
[illegible]すんの[illegible]
[illegible]の[illegible]
[illegible]

[illegible]の[illegible]
[illegible]の[illegible]
妾心正断絶
[illegible]
二千里の[illegible]
[illegible]の草津[illegible]
[illegible]
[illegible]

蓮花王院

稱すべし婦のとなつるり　このうちのたゞ子
なるさうあはれたゞかりけれとも人の御られし
却のうつけいたにまつてもまれもまたり
いせの陣の他力といつて人のなす
なの漕のみをおつかるまゝ御たる
これはわこさ子間ぞおとこさもの
おとこさまゝ馬ねこうをいせうるう

霍公鳥　万葉　時鳥　古今新古

沓乞　郭公　コセン　子規　金　鵑
催歸　勸農鳥　蜀魄　納鳥
杜鵑　ヨセン　不如帰　周燕　鵜
望帝　杜宇　子嵩　保度、木禎
トウケヱ　鷓鴣　陽雀　怨鳥
鶗鴂　四手田長
されば月雪花のうつりまゝ景物の
うつりてをゆきはいつのよせうをもと
さかしのるゝよかしのよこ人の御と

きく人のあれハ此ゆゑ時けかんこゝり
千渓り手ねなくらむ　すんたかを
一ねたゝ音の作り　法ゆゑ　閑　古鳥

よろ神代とよふひとりまるかんこゝる
ちくこゝの当をていねいり　布穀
秸鶉　江戸ゑこゝ　こぞりなく
しるよしのちゝにまみれを　笑ふより
鴉鳩　悲の好りし　法ゆゑ　八流ゝ

さく連中とゝふまれ中万の喬中とゝる
人のこゝ思ふり　吊ゆ人の自ことゝ
そゝ花ゝるおとゝろの姿しくも今
ありやくありや　まふさゝるなくかんこゝる
よさ史のつくりかゝ　あなたゝ鳥
つまもゝしなるかもしゝ　かんこゝる
かんこゝり　くれて　小さのさハくなり
　まふる熊坂のくひくふを　よなれ
新の坂のなくなれ　ひとりも　ひとりみ
　鶯をまゝ橋のぬし　法ゆゑ　あるひと

[illegible]

[illegible]

七枚堂[illegible]庵の賀

[illegible]根[illegible]

方[illegible]人[illegible]

[illegible]

[illegible]涼[illegible]

若[illegible]

[illegible]女[illegible]

一維舟俗名大文字屋治右門松江重頼ト号
初良徳門后里邑門人也延宝八年庚申
六月廿九日七十四戈宗因鬼貫モ此門学
誹諧　毛吹草之仇者也

[illegible]

[illegible]

[illegible]

竹のこのまをのぶるせむるえ
おもやいまこせ品のこのうち
なくなるやこのゝ買ひれさらうり
母をうしまつて人のかたへ
彼れのしし隅り呉様のうちハ御
白図となりの義えりかく称うり
むしをうつ時を紙なる扇のこゝ
ゑゝ入ぬあゝさかれしあつさ小

かのこ一かゝる咲のゝる
昨のこゝかり図る様の下ゝ来

一良能曰人のまさゐ志ゝむるかゝるさなも
何ましれ打ふ心これ即仏魔之を此日を
人りゝかしをさせてあらはし未来記にする
頁いくさ切るまして かつるなりといひしおく
かゝのこさなもしれしあるふ心いそさぐむ
己ゝちいかいの地まてうしなつれ

一又白翁の咏子云かしにても家よりこよの
人の為場所まとにかゝるまでも御ゆにても
其中うちとりて持ちをうくるし家より
をとり行人の中まてゝ雇しつめたるを
無ゆへし又他国他つゝおくまでも
かゝ大事御のおこよのおまでにかゝ
むかちりあるを知るし家しのちかえ
法あるまでを聞るかりと
これをいかいるのろひ事の心得なひ

十廿二

家集

なつの森といふ題
夢ゆ森ま峰ゆる一二の紀をひ御
あるまし江戸子ゆし時
宮中庵と両吟
おりひいてきはす
夫人の四年古江の翁と
往事をかたりて
夜座も何ゝ父在れ情の御　完来
その父いまれもなつの月　古江丸

なほ見つるも嬉もまゝ嬉おうかれ　今
耕地家なる園のあるほら　来
つゝみれたりに夜の出づさたら　今
後るゝ嬉もかすりのち花　九
ウ 面鏡の屏風てゝる　なの松　今
こふあり すゝ也る竜門の鯉　来
三悔ひ僧の姿れく　女とも　九
あゆえうあらさ浪のうね舟　来
ひゝ雨のいゝくたられうちとて　九

ナ廿三

神酒の鼎りに向ふ本殿禅　来
五位のたゞ尸たしめて月ほひ遊ぶ　九
名古屋の園をこの此方旅　来
けうゆゝしきのもしまきましの名　九
花をかりし桂のうせかの　来
なにうれと壬生の化優花ちりて　九
品うちりら　垣の和の声　来
二 日のかほうひしたむ宮のひつと　今
隠なり姉して東との魚　九

ひきまとふ還城楽の百万騎　来
奔馬りむちの按摩追ゝ　九
臼性け車をこらり行小路　来
絳茅刈をもとれ冬こち　九
羅り春人の膚ふくまり　来
法也のいけらを君たひらぬ　九
法よする外りまなき島のしも　来
月のかつらりぞるゝ荒昆布　九
島を呑ム座行七日の牛むろ　来

桜の戸さし　鳴の出をうつ　九
をのかれし雲の巨椋も掃ぬ　今
ひとりねしてことなゝ人ゝ　来
ひとりなる桜し日かゝのさ　九
椋香出し月まちの声　今
花いと雲の掟もむかし　来
雲りかつらぬ　よるの小鳥　筆

なる人より雲の頭

一百年云ちやぼ鉢の月をつかまくものゐ
これハむかし若氏のうことて
すまよりもあしれかうわかれて
日をつかなくも仕事をふくこのうちを
かねてをつれ其庭りとめいとも小周
り御のとき少枝をたつねて仕の所仕の山の
推諸り枝のうつハをとかりもひしこれとも
もいかいふ鉢をたうものれかうれしけうて
いれのまゐしてしれ

けしの花うけとりかくし鉢にハり
姉川春のをかくて吟れりと
春のの花ちるものあしてちるも見寸
けしのちゆ花れちりをとにハり
の月ゆれ
ひしに打をけしてたんをこぬ鉢小
玄庫の北風といふ事すちを
そのかへ神功皇后の三國退治の
供時なり仕をまりし舟の事之

[illegible]

[illegible]新田義貞より[illegible]
[illegible]
[illegible]
いつしかたゞひなりけ

少將の二千日の[illegible]のひめまし
[illegible]の夜[illegible]
[illegible]
[illegible]の夜を[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]

ひとりこれ[illegible]
小[illegible]

一連[illegible]の日[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]衡[illegible]
[illegible]宗盛[illegible]
[illegible]時[illegible]

はしめて三位中ねのかの助かりてなしを
あるをせら小さゝゆひ中のゐを八幡のおとゝの
おろかにして人おをさちさる御身末のこゐを
うゐくゝの大きの国家法師りもてなきぐる
相をのこせり

さいかいりた人なし鳥をさつかつて
鱗の所の顔をもたかりけるを
いつのあさかつを幡なまなつくひ

日蓮れ小みあひ川やさ川松島
曾我兄弟の画
小隊の使をまくり さ川しかつて
手力りのせてさしむけ花柚る
なゝ庵のもみちもこゝぬ春田が
なきこれ日くれてものをいろく之
一涼仲云さいかいりさいらすしの
なめて調なかつのりのを忌ふらよ
ひしさひこそ国まれあらうもあれ

あらつる日

ちとせん遠ひ川なりしあらむ

ほるへの新年の賀りし

新はしかりしかれて祝しけり

鳥酔　二十五年馬明なし

年とまはるいまやしまなし

わかひいてし　四月宮

三代目をわかりつん　ひさしき　千年の鳥

春の御ふ　遠しし　たかりの御

一周行云なる間にさきなきなきへし

るのおりてより心のよさ　ほのみのえ　たやはの翁の

いへり秘心の人なりしすとの名はいろいろ

あはれとよかりす翁はいさまつらはろさ　ひく

やれも乱るひと宣ふ法　ゆるし　おもひ　さらしは

かれんすしらしと翁の云　今の詞にかなれ

さらしは秘れすしきかれ　宗派を　又其外の

わりかけの遠まゆうし　たまつり翁も心を

とふ言はふかしとかれ　其ほうさしと

せんぢ棚のおくちつくして足ばかりと戸ねぢ
ちらんも心まゝにまゝし玉棚のおくなつくや
鏡のかほとまゝ七ふまちつくせして
下をけゆけく鏡のかほとしてまゝかしと
ゆらさかりふれすゝにゐるよなるおそれ
かくかひしつゝかつけて心をくゐさゐると
おもひしと形る子をちかくかくのまゝ
心をくちひしゝ師ゐ前さうけるかれしや
まれし

仰相覚の流し魚を給ひ 坂屋の君
りのいつゝ深の坂まり まちり の段
叶ふ恵 坂も 万歳と うたふなり
江戸京 侍ひ候りかく
おもひけるまゝ御ゐらしおゆさりの段
まゐらゆふきい坂とあれと又をて
せゝ臨しそのいつゝをなくらし
ちれらしし 掃を たゝあらまゝ山林
稼ふの花ちらせといるの前にみち

柳ある屋とせけり称このつら
のこ乃ちへ屋をあきなのかたふりの
屋をりねめきもめ点をようちなま
深俗の云 康の寺の間ぬらやうに
あみちとい宗徳のおりめしを志かのねの
とうめのをまこましとい春林かさいかい乃
こちらや浜り雪行大加席と李白か人を
おうらせも明るまして雪行大加鶯とは
浜をかつてり ト

一松永貞徳 松永彈正久秀男 永種
といつるう 妙顯寺 ゟ 法師 なりて
下冷泉 妙壽院 妹を 嫁して 徳をうめり
幼名 勝熊 仮名 鶴三 道逆軒 晩年
後 束髻 着童 腋 自号 延陀丸 后 又
長頭丸 ト云 元亀元年 未のとし 生
兼應二年 癸巳 十一月 十五日 八十三才
単和 是てしこうらけらおゆめり
ちまはけやりしを浜まひておゆめ 仲

をくて釘倒なるなりけり
姑嫗てこまれてちかもえトの水
いつもあれとあらぬ夜の頃の
ほしんのいつる一巻のかりてのうちをちまな
白を無しんまもかひ見りしきすすれな
ひまたり行心の二三口の行のかまりてに
ふ道のかまりもまれ心のまゝ白
すゆるこれを花のかうへかなしきこと
いつも悔ふれし

一雪中庵蓼太の句ヨ
さみだれやあるおひうちに松の月と云ふ
かしこのより ほめしにしは事のめつしりけれ
ちらり ちるす

撒蜜他列非阿兒要披促草尼
麼子那次吉　雪中庵蓼太

蓼太先生者隠君子也都人土似烏
金馬侍従之流亞矣乙未春於崎陽
客舘得非偕歌一章言是先生所著

僕不能讀其國字故就譯士某得
解解則興在景中意在言外大
非俗品可知蓋僕亦有所感也因
賦一絶寫其意倣顰之誚可不
辭也

長夏草堂寂　連霄聽雨眠
何時懸月色　松影落庭前

乾隆四十年孟夏月望後三日
雲間程劔南

[illegible]
唐土より[illegible]
[illegible]東叡山の[illegible]
[illegible]
諸太史粉川[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

炎帝

一員九日は御の座おつまるにしたひ時
人なるをしらふ世目ありなりけれ　同ふを子
秋の始りなりまたりとしてあらるゝ日のきこ
しりつゝ子をのはしめにちりかけれ
次まいふ家をも題をかなし連家
なるを題してよりしかしむ志をも
時をたゞれ書つゝ之と

悼年後主人を
松地のぬしを果蔵のいちくらる

さまたしあり蔡邕李白さこのめる
みちを心のあと志をかけし年を
おりひいて三とせの今日を弔ふ
午後のぬし

三ヶ年酒とかたれし人もこの夜を
羅の君やいつれの贄りしむく
目さむれは蝉石の樽の御
ゆふのほのとまらしたをあらさめま
るのほや　ノ　あとうまし　ずんと切れ

上毛野國友岡のさとのはゆる

[illegible]

[illegible]

[illegible]

一季吟 江州小[illegible]の産 少村又助貞徳門人
拾穂軒 芭蕉大師再昌院法印 宝永二年
酉六月十六日 没又八十六才

一[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

泉州左海山脇義祖宇和度の祝
寿亀祝とゝかゝる
詩哥連俳をもとめて祝せらるゝ
六月廿四日の出さの日をかゝえ
かめしまとゝいふ祝なれ
あまし百川老人のとの佳意を
名をつけられしかゝる事をかゝる
よろ津代の魚市ひとりもしき世の外

一羊時庵洽々者大坂西横堀阿波屋ノ子
延宝二年甲寅六生幼名熊之助後傳七
江戸に下り小納町ニテ呂國曲関宗治キ角門ノ
漕北京都住下川原 林三揚松木洽々
江戸堀百川又勃窣翁晩年左界ニ移り
又大坂島之内ウナキ谷亀亭別庄々没寸
宝暦十一年十一月二日年齢八十八歳墳ハ
難波鉄眼瑞竜寺法号高源朝水居士
あさしりや紀て画しあこの山

此句者前年詠処其時節故用之
江戸をたちて角田川の紛るゝ時に
き角二十五才従平元年より
去年も江戸の風やはり其の地
殊に勝れしと
去年の流れ萩ふるゝ何かの都鳥や
しら此声ありても集るる　又かねて二樹二石之
あそひのえ　文選古詩　古墓犂為田松柏摧
為薪之謂なり　此塚　寺中門之右脇有之

揺さらす浮かれて遊ぬ　隅田のあたりや
人かて風かやかみれ寄るかきり
梅薗の白きおんりきのほとりを
からひとをあぬ人をおしきおんの白
みそらにむすれてまりさらんちり
おりし日を清水に川なるあつき郎
春てかし宮ちのうゆしつあ郎
うまき　旗しむし　ちむ御おふりや
数代のよつもらく　川　辛ふすよ

唐の代とうにはるき法の
こゝろつけるは接の神うしも
いさうふ二十日あるとき御の戸
よるの芝蓉さちしりけてを
風ふりあやれく月の雲えしる
あひしき紀の綱と果てくさ
今も紀お内表法の名を呼し
法を解りうき彦右 二郎代
係きひ酒きしひしまなる

九 岳 九 岳 九 岳 九 岳 九

鳴りとかゝる声のしるの形り
東叡の七歩の法をみ遠き日に
ちろ宣なるされ人のまな
うき無り仰ひ知るのちつき
きのふ乃ら八専のこり
あらむる水室の翁眉ちし
掃をさらに御襁褓の皇子
ひ下の花もあるおそ呼し
こゝつしなるや金まるの神

岳 九 岳 九 岳 九 岳 九

いけにこの山よりかゝる神ゝ　斤
おりぬ歯をきみ御ぞかゝる　丸
法御りゝ君りすまれ御ちかり　斤
笛をりこと此ら母りしとゝる　丸
よろ津代の月すらくてさのほり　斤
ありちりなき花や酒刻　丸
ゆ
新堂のをとれるむらいんや殿　今
とをり跡る人たりなり　斤
よみしなしあらせれせりて　丸

十四十八

斎くさ百姓牛のちりぬく　斤
いちりの関なる花のみしひとし　完来
ゆのせみもうみふの春　午心